

令和元年度 T A C 取組事例報告

(J A 太田市)

タイトル

「藪塚ほうれん草産地の基盤強化」～産地の継続～

(報告者) 営農部 営農指導課 石川 純也

T A C または 営農 渉外 等 歴 : 5 年 目

<対象となる地域農業の担い手の営農状況>

①活動時期: 令和元(平成31)年 1月 ~ 令和 元年 12月

②地域農業の担い手

・ 類型: 認定農業者

・ 主要作物: ほうれん草 ・ 栽培面積: ハウス(約160ha) 露地(約50ha)

藪塚地区では、昭和60年頃から雨よけハウスによる半促成すいか(前作)+ほうれん草(後作)野菜経営が盛んに行われてきた。近年は高齢化等の労働力不足から、雇用を導入した周年ほうれん草への経営転換が進んでいる。最近では、夏期のほうれん草は高温などにより生育・出荷が不安定となっている。そのため、平成24年夏の試作として小松菜の導入が進んだが、全国的な生産増から夏場の価格が低迷してしまった。(図1)

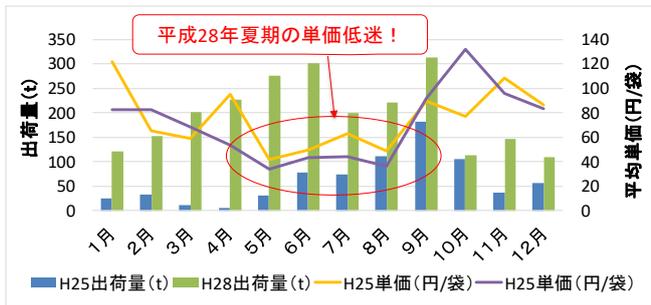


図1 コマツナ出荷量推移とH28単価

<対象となる担い手に提案するに至った背景…担い手のニーズ>

藪塚地域は、農家・市場・関係機関との強い結びつきで出荷量を増加させてきた成熟した野菜産地ある。現状の生産体制維持、または必要に応じて規模拡大する中で、年間出荷量・所得の安定と荷姿の格差解消を図っていくこと、言い換えれば、「農家所得向上に向けた産地全体のコーディネート」が求められていると思う。そこで、農家所得増加を目標とした「ハウス軟弱野菜産地の強化」を計画の重点とし(図2)、これを進めていくためにJ A 太田市野菜振興プロジェクトを関係機関で構成した。(図3)

図2 課題作成にむけた S W O T 分析

	内部環境	強み	弱み
外部環境		<ul style="list-style-type: none"> ・質量十分で周年安定供給 ・情報が早く、栽培技術が高い ・規模拡大、生産拡大志向 	<ul style="list-style-type: none"> ・世代交代で栽培技術に差 ・外国人技能実習生頼み多い ・生産コストが高くなる傾向
機会	<ul style="list-style-type: none"> ・量質とも市場では重要な産地 ・夏期は市場入荷量少、単価高 ・群馬県重点8品目 	<p><強みを伸ばす></p> <p>(4)生産拡大</p>	<p><弱みの克服></p> <p>(3)荷姿の格差解消</p>
脅威	<ul style="list-style-type: none"> ・猛暑で夏はより作りにくい ・コマツナが夏に価格下落傾向 ・補助事業の要望多い 	<p><弱みを克服して強みに></p> <p>(1)6~9月の出荷量増加</p>	<p><弱みの克服></p> <p>(2)夏期代替作物の安定生産</p>

図3 推進体制

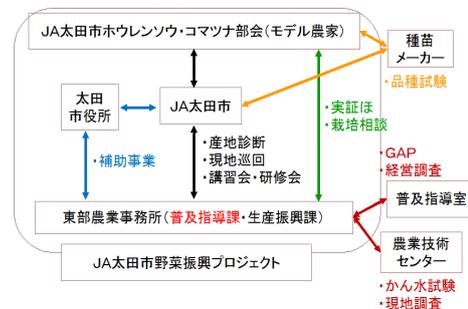


図5 目標を見据え、戦略を踏まえた計画の産地強化フロー



<取組内容・提案内容>

1. ハウス内環境改善

近年、最高気温が40℃近い猛暑が続き、従来の高温対策ではほうれん草の生産が不安定となっている。また、難防除病害虫なども併せて求められ、以下のようなハウス内環境改善に取り組んだ。

(ア) 新遮光資材の検討

慣行の遮光資材（銀色）では、夏期に生育が停滞する等の課題があり、そこで新資材（白色）の検討を実証圃で行った。この際、サーモグラフィを活用したハウス内温度状況を可視化して農家に示すことにした。（図1）

(イ) ほうれん草ケナゴコナダニ対策

春期を中心に「ほうれん草ケナゴコナダニ」が多発することがあり（図2）、農薬散布による防除を行っているが、十分な効果が得られず対応に苦慮している。また、農家からは「生態も含めた勉強会を開催してほしい」と提案があった。そこで、ほうれん草ケナゴコナダニの生態と防除対策を研究している山口県農林技術センターの研究員を講師と招き防除研修会を開催した（図3）。

図1

	①新資材（白）	②慣行資材（銀）
ア) 遮光状況		
ウ) 栽培状況		
エ) サーマグラフィ		

図2



図3



2. 所得補完作物の栽培技術支援

小松菜に替わり、6月～8月に出荷出来る所得補完作物を検討・導入することで農家の経営安定を図ることとした。農家・東部農業事務所と導入品目を検討した結果、モロヘイヤ・インゲンを初めとして数品目が候補となり、栽培講習会や現地巡回、品目によっては現地視察研修も行った。

<担い手にとっての成果>

1. ハウス内環境改善

(ア) 新遮光資材の検討

実証圃により、新たな白色資材は、慣行の銀色資材に比べて資材や植物体の表面温度及びハウス内気温が低くなることわかった。また、株が充実し、品質も良くなることもわかった。（図1. 2）この結果を栽培講習会で農家へ情報提供したところ、新たに7戸が新資材を導入し、出荷量が増加する結果が得られた。

図1

遮光資材	調査株数	1株重	最大葉(cm)			8/8(快晴)	
			草丈	葉柄長	幅	日照量 (lux)	遮光率
新資材	35	15.6	25.3	12.7	8.3	537	54%
慣行	34	14.2	25.6	13.5	7.6	440	62%
屋外	-	-	-	-	-	1,161	-

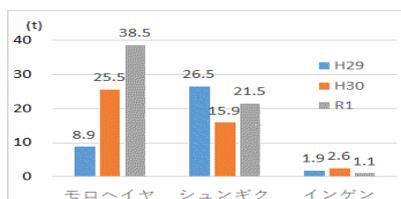
図2（左：慣行 右：新資材）



2. 所得補完作物の栽培技術支援

小松菜農家に限らず、ほうれん草農家にも所得補完作物として、モロヘイヤやインゲン・春菊などが導入された。導入モデル農家の平成30年度の試算では、導入前に比べ、5月～8月には毎月の粗収益を向上させることができた。（図1）特にモロヘイヤは新興産地ではあるが、市場評価が高く「藪塚のハウスモロヘイヤ」として新たな産地を形成している。

図1



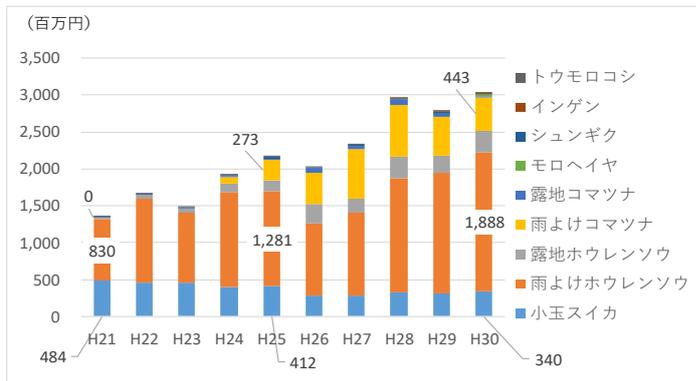
<担い手の評価・声>

ほうれん草ケナガコナダニ防除研修会に参加した農家からは、「体系づけられた話を聞く機会がなかったのでとても良かった」、「今は徹底した防除は難しいが、皆で考えていく必要がある」などの評価が得られた。また、研修会で紹介した土壌消毒剤について、「効果は理解するが、安全で省力的な散布方法がわからない」との声もあった。そこで、農業・機械メーカーなどと連携して省力的で効果の高い散布方法を検討しているところである。今年の9月頃収穫のほうれん草にケナガコナダニの発生が見られた農家から、土壌消毒剤を試験散布したいという話があり、トラクター装着機器でキルパー散布混和試験を行った。



<JAにとっての成果>

藪塚地区では、生産環境の変化にあわせて様々な取組を行った。その結果、小玉すいかからハウス軟弱野菜を中心とした経営に変化しハウスほうれん草やハウス小松菜の生産拡大や所得補完作物の導入が進みました。また、秋まき露地ほうれん草・露地小松菜の生産拡大や労働力確保のための周年雇用など、農家自身が所得増加に向けた取組をおこなっている。こうして、産地全体の出荷量増加と農家所得の増加が図られ、農家の経営安定化することで後継者が定着するなど、産地の活性化が図られている。



これまで取り組んできた課題には、すでに普及しているものや取組を始めたもの、またこれから取り組む予定のものなど、解決に向けた様々な段階のものがある。今後もこれらの課題を解決するための技術改善・提案を続けていかなければいけないと思う。営農指導・販売・生産資材が連携をとって、農家と一緒に課題を一つずつ解決していくことが大事なことだと思う。